

校舎・授業の様子

学校名	京都市立洛友中学校
設置年度	平成19年度
対象生徒	・入学手続きでの学校体験（授業体験：4日間、体験入学：連続4日間）を経た生徒
生徒数	・昼間部15名（夜間部18名）
教職員	校長1、教頭1、教員11、非常勤講師4、事務職員1、管理用務員1、スクールカウンセラー1、スクールソーシャルワーカー1、その他（総合育成支援員、学校司書、ボランティア※10名を超える学生ボランティア含む）
転入学までの流れ	<ul style="list-style-type: none"> ・教育委員会が設置する不登校相談支援センターでの「面談」、「センター活動」を受けることが前提。 ・2月の体験授業（4日間）、4月の体験入学（4日間）に参加し、転入学の意志を確認したうえで、5月からの転入学となる。体験授業・体験入学に参加できなければ転入学の対象とならない。
教育課程	<ul style="list-style-type: none"> ・770時間 ・始業時間13:30、終了時刻18:15 ・昼間部と夜間部の合同授業あり
その他特筆すべき内容	<ul style="list-style-type: none"> ・学びの多様化学校（昼間部）の生徒と夜間中学校（夜間部）の生徒とが、世代や国籍を超えてふれあい学びあう学校。 ・柔軟な教育カリキュラム、小集団活動、毎日の教員面談等生徒が学びを継続しやすい環境づくりを行っている。 ・授業のみならず、学校行事においても昼間部と夜間部の合同行事を毎月実施している。 ・授業時数よりも登校刺激となる行事を増やしている。



○上左：全学年時間割（ホーム教室に掲示）

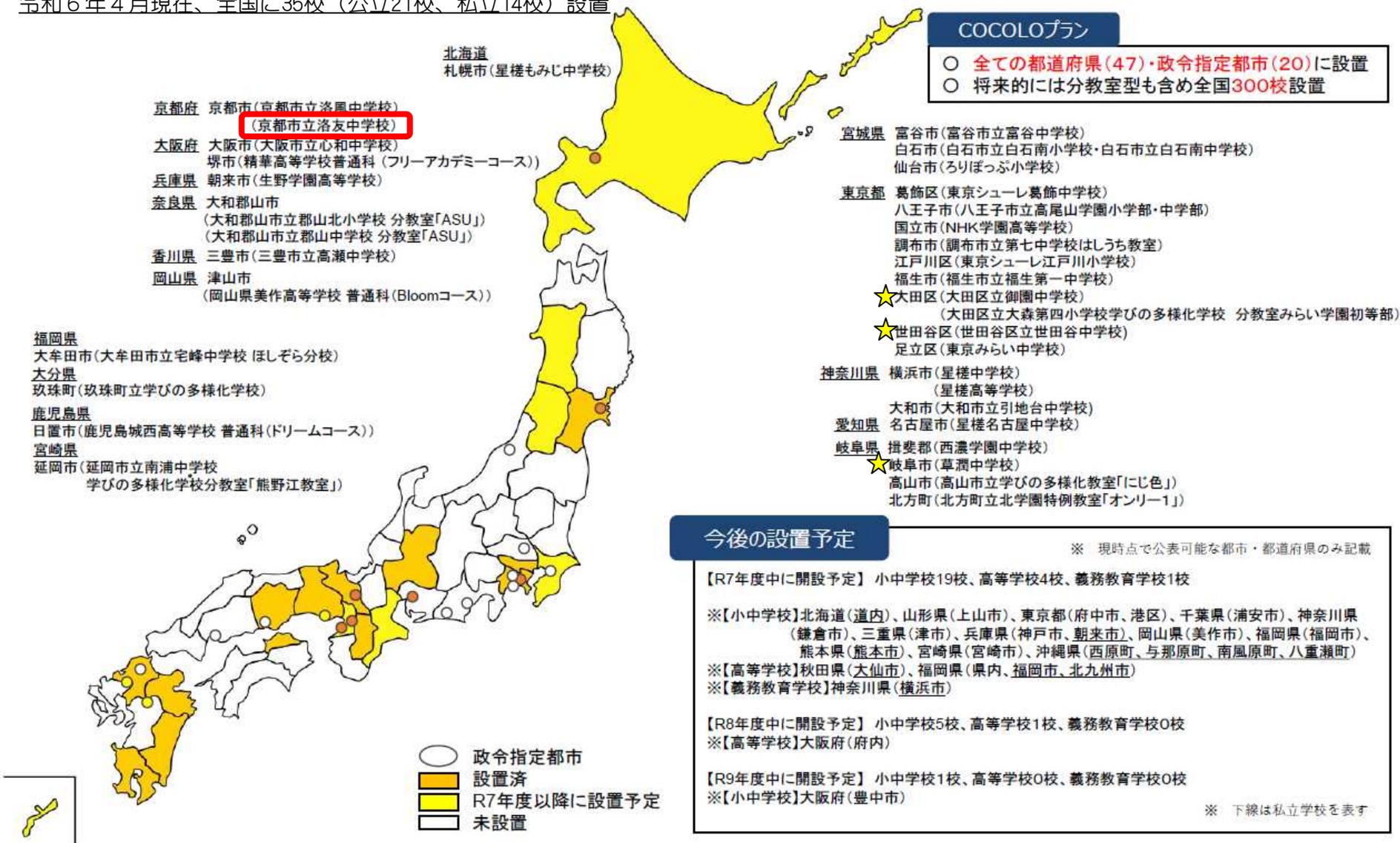
○上右：教室後方にリラックスできる道具類がある。

○下左：夜間部の生徒と昼間部の生徒による家庭科の合同授業の様子。

○下右：廊下には生徒による作品の展示スペースがあり、生徒の創作活動による表現を大切にしている。なお、図書の本棚も廊下には配置されている。

学びの多様化学校の設置状況

令和6年4月現在、全国に35校（公立21校、私立14校）設置



京都市立洛友中学校について

設置年度

平成19年度（前身の京都市立郁文中学校は昭和22年開校）

対象生徒

1. 京都市立小学校6年生又は京都市立中学校に在籍し、不登校・不登校傾向にある者
2. 転入学希望者及び保護者の住所が、京都市の区域内又は八幡市八幡長町、八幡樋ノ口及び川口高原並びに久御山町大橋辺にある者

教育課程

770時間（※標準時間 1,015時間）

生徒数

昼間部（学びの多様化学校）15名（※夜間部18名）

教職員

校長1、教頭1、教員11、非常勤講師4、
事務職員1、管理用務員1、
スクールカウンセラー1、
スクールソーシャルワーカー1、
その他（総合育成支援員、学校司書、ボランティア
※10名を超える学生ボランティア含む）



転入学の流れ

相談



書類提出

不登校相談支援センターへの申請期限あり（12月初旬）



面談

「面談」、「センター活動」を実施する中で学びの多様化学校への転入学や教育支援センターへの入級など、一人一人に応じた支援方法を検討



センター活動



授業体験

【2月】 1日2時間程度の授業を体験（4日間）



体験入学

【4月】 在校生とともに、通常の時間割の授業に参加する（4日間）



転入学

【5月】 転入学

不登校相談支援センター

洛友中学校

※不参加の場合、転入学できない

昼間部と夜間部の交流

昼間部		夜間部
学活	13 : 30~13 : 40	
1校時	13 : 40~14 : 30	
2校時	14 : 40~15 : 30	
3校時	15 : 40~16 : 30	
4校時	16 : 35~16 : 55	
5校時	17 : 00~17 : 30	1校時
6校時	17 : 30~18 : 15	2校時
	18 : 50~19 : 35	3校時
	19 : 40~20 : 25	4校時
	20 : 25~20 : 40	学活



昼間部全員が同じホーム教室を利用し、各時間割に応じた教室に移動して学習する。



家庭科の授業風景。同じ教室の右半分では、昼間部の生徒が学習している。



教室後方には、夜間部の生徒と合同実施の修学旅行などの写真も掲示されていた。

実技教科や総合の授業などの時間は、昼間部の生徒と夜間部の生徒とが合同で学習を行う

参考となる点

- 転入学前の準備
- 世代や国籍を超えた学び合い
- 施設・設備や人材の共有

検討すべき点

- 出席数の確保
- 交流の手立て
- 教員・ボランティアの確保



洛友中学校の校章。昼間部の生徒と夜間部の生徒たちが、ふれあいながら共に学び、共に楽しむことを体験する中で、人と人とのつながりの大切さを感じ取り新たな生きがいを生み出していくことを表している。